

「放課後こくば教室」の現状と今後

島 村 聡*

After-school Class in Kokuba: Present State and Future Prospects

SHIMAMURA Satoru

要 旨

2016年度から2018年度まで、沖縄大学が文部科学省に選定されて実施したブランディング事業で実施した取り組みの中で、その中核となった「放課後こくば教室」の現状や課題、そして今後の展望についての報告である。

キーワード：子どもの貧困、こどもの居場所、子ども食堂、学習支援

1. 経過

平成28（2016）年度に私立大学を対象とした、文部科学省の「私立大学研究ブランディング事業」が始まった。同事業は、学長のリーダーシップの下、優先課題として全学的な独自色を大きく打ち出す研究に取り組む私立大学・私立短期大学を重点的に支援するというものであった。初めての公募の年になった平成28（2016）年度は全国から198校が申請し、40校が選定された。沖縄大学は「沖縄型福祉社会の共創—ユイマールを社会的包摂へ—」という研究テーマで選定され、特に沖縄県の抱える大きな問題としてある、子どもの貧困の解決に寄与する研究支援と実践支援を柱として、地域研究所が主体となり事業に取り組んだ。「放課後こくば子ども教室」（以下、「教室」という）は、その実践支援の大きな軸として、平成29（2017）年度から那覇市繁多川公民館が主催し、地域研究所が協力する形で開始したものである。翌平成30（2018）年度からは、本学が主催となり、ブランディング事業が終了した2019年度から現在までも継続して教室を開催している。地域社会の中で子どもたちが安心・安全に過ごせる居場所づくりや、健やかに成長するための放課後対策の一つとして、近隣小

* 沖縄大学教員

学校の児童を対象に学校の宿題や自主学習の時間を設け、学内スタッフや学生、地域の協力者を招いて昔遊びや伝統おやつ作り、スポーツなどを企画運営している。当初週一回の開催だったが、子ども達や地域の要望があり、現在は週二回（水曜と金曜15:30～17:30）の開催をしている。そこに「子ども文庫」を設置しており、教室に通う子どもたちに利用されている。子ども文庫は、家庭等で使用されなくなった児童書や図書、辞典や漫画等の寄贈依頼を広く行い、提供頂いた本等にクリーニングを施し、閲覧できるように配架したものである。寄贈冊数は平成29(2017)年度は1,055冊、平成30(2018)年度は674冊であった。また、平成30(2018)年9月からは、文化的貧困への取り組みとして、一般社団法人琉球フィルハーモニック、及び沖縄県内外で活動するミュージシャンにご協力を頂き、「ジュニアジャズ教室」を開催し、子どもたちに楽器演奏の指導を行っている。使用される楽器は子ども文庫同様、家庭で使用されなくなった楽器の提供を広く募り運営を行っている。寄贈された楽器はトランペット5本、トロンボーン2本、サクソ3本、ドラムセット2台、電子ピアノ1台、エレキベース1本である。ジュニアジャズ教室で練習を積んだ子ども達は、沖大祭や地域の祭りなどから依頼を受け、演奏を披露している。この子ども達の中には、不登校だったが楽器の技能習得により自信をつけ学校に通い始めた子もおり、一定の成果が見られた。

2. 現状

教室を利用している児童は一開催当たり平均19名、学生スタッフ同5名、民生委員等の協力者が同7名である。来所した児童の頭数は以下の通りである。

2018年度109名

- 1年生16名（男子14・女子2）
- 2年生10名（男子2・女子8）
- 3年生18名（男子12・女子6）
- 4年生25名（男子7・女子18）
- 5年生35名（男子27・女子8）
- 6年生5名（男子0・女子5）

2019年度94名

- 1年生5名（男子0・女子5）
- 2年生10名（男子8・女子2）
- 3年生14名（男子7・女子7）
- 4年生22名（男子13・女子9）
- 5年生12名（男子2・女子10）
- 6年生31名（男子25・女子6）

2018年度利用の5年生がそのまま6年になった2019年度も引き続き多く利用する傾向があった。また実施している主なプログラムは以下の通りである。

●**工作あそび**

近隣に住む自治会の方や民生委員・児童委員の方が講師となって、昔の手作り玩具等を子ども達と一緒に制作している。主な玩具はパーランクー(手持ち太鼓)、ゴム鉄砲、凧、七夕かざり、万華鏡、トーテンポール、チャンバラ遊び(紙工作の剣と盾)、竹とんぼ、アダンの葉工作等である。

●**おやつづくり**

ボランティアの民生委員・児童委員の方が中心になって、子ども達と一緒に軽食やお菓子を作って提供している。これまでに手毬寿司、カップケーキ、カレー、やきそば、ムーチャー(鬼餅)、ポーポー(沖縄風クレープ)、流しそうめん、餃子、ミニミニピザ、串団子等を作って一緒に食べて、簡単な調理体験と共に楽しい時間を過ごしている。

●**フットサル**

近隣でフットサル指導をしているボランティアに協力を頂いて、隣接するグラウンドで開催している。ボランティアの方は他にもいくつかの学校等でフットサル指導を行っており、フットサルの事だけでなく、子どもたちとの関わり方・対策等を一緒に考えていただいている。

●**チェンジー(琉球王国時代から沖縄に伝わる伝統将棋)**

琉球象棋童子クラブ会の協力を得て、中国発祥の盤上遊戯を教えている。さらに年配の講師からはチェンジーだけでなく、手品やうちなーぐち(方言)講座、沖縄の歴史など等子ども達に伝えたい事、教えたい事を沢山話して頂いている。

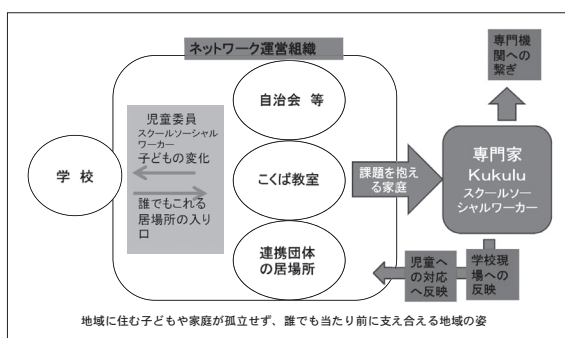
●**自由遊び**

特に内容を決めず、子ども達が好きな遊びをしてもらう日も設定している。個人から頂いた卓球台を使って卓球をする子や、学生ボランティアを誘っての鬼ごっこ、オセロ等の盤面ゲーム、漫画や本を読む子等自由に遊んでもらっている。また夏場はグラウンドに出での水遊び等も行い、水鉄砲や水風船をぶつけ合ったりして子どもたちは大喜びである。

3. 課題を抱える子どもへの対応

教室の運営に当たり、「こくば教室ネットワーク会議」を持ち、近隣の自治会長、民生委員、学校長、親、協力している住民を交えて教室の課題の整理と今後の運営について話し合っていた。落ち着きのない子どもや気になる言動がみられる子ども、不安を訴える親が何人か見受けられたため、それらの家庭にどのようにアプローチをするかが議論された。そこで提起したのが次頁の運営のイメージである。

教室では、実施日の日報を担当者が作成するが、その際に気になる子の情報は枠を設けて記載している。上記のように明らかに課題を抱えていると分かる子どもや親は繰り返し日報に出てくるものの、その背景にある家族の問題や障がい起因するような課題まで教室のスタッフが関わることは難しいと考えられた。そうした個別支援に関わることについては、本人の了解を得た上で専門家の力を借りていくこととした。これまでの例としては、スクール・ソーシャルワーカーが巡回に来た際の情報交換、NPO法人が運営する子どもの居場所kukuluのアドバイスを聞くといったものであるが、具体的な個別支援の連動を行ったことはまだない。これまでの課題を抱える子どもの主な変化について、事例を挙げて説明をする。プライバシー保護の観点から、事例の内容が雑ばくであることをお許し頂きたい。



こくば教室の将来像 案

Aさん

友だちとの喧嘩や嫌がらせを繰り返し、学校でも先生から注意されることが多いとのこと。母子家庭で母親には精神的障がいがあるため、民生委員・SSWとの連携をして対処した。最終的には他地区の小学校へ転校した。

Bさん

家庭環境が原因による情緒不安、自傷行為などもありSSWに情報提供してきた。ジュニアジャズオーケストラのメンバーとして途中まで頑張っていたが、2つの世帯に預けられたことによる生活環境の変化や交友関係の変化により徐々に来所しなくなる。

Cさん

集団生活が苦手です以前から不登校。ジュニアジャズオーケストラのメンバーとなり楽器と出会い人前で演奏する事の楽しさを知り、徐々に登校出来るようになる。現在は発表会などの際に誰よりも生き生きと演奏する姿が印象的である。

Dさん

学校によると2019年4月からずっと不登校とのことだが、9月から教室に参加（前年度までに来室経験あり）。9月最初の頃は人に警戒する状態だったが、徐々に慣れ、同じクラスの友だちとも遊べるようになり登校出来るようになる。しかし、2020年1月から来所しておらず、その後不明。

このように、SSWや民生委員と連携を図っても来室しなくなったり、背景を知る前に動

向が不明となる子どももあり、完全な対応は難しいが、Cさんのように生き生きとした例もある。全体的には、例えば4年生の頃から継続して来所してくれている6年生男子が、最高学年になり、落ち着きや成長がみられ特に低学年と一緒に遊ぶ姿や、皆で協力し合う姿が多く見受けられるというように、子どもたちの成長を感じることが多い。筆者の研究^{※1}でも学校等の関係機関と地域（住民）との繋がりやの深さがある居場所は機能しているが、その意味では子どもたちの安定に一定の役割を果たしていると考えられる。また、課題を抱えた子どもたちとの連絡が途絶えてしまわないように、教室での様子を子どもの貧困対策支援員（内閣府予算で市町村が配置した専門的支援職員）を通じて提供する。同じ地域にある他の居場所とのネットワーク会議を活用して子どもの様子を交換し合うといった関係づくりができたことは評価できるだろう。総じて子どものニーズを発見し地域レベルの寄り添いを得て、対応困難な事例は専門職に繋げるといった居場所の持つべき機能は、一定のレベルに達してきたと言えるのではないだろうか。

4. 今後に向けて

2020年4月現在は、新型コロナウイルス感染対策のため那覇市内の複数の子どもの居場所が閉所している。教室も大学の閉校に伴い活動が出来ない状況にある。しかし、小学校も閉じられている中では、課題を抱える子どもや不安な親が不安定な状況に陥ってもそれを確認したり解消する場がなくなることは出来れば避けたい。本教室では担当者が気になる家庭に電話をいれるなどしてコミュニケーションを絶やさないように対応しているが、子ども同士あるいは居場所スタッフとのふれ合いによる啓発効果と比べると限界がある。改めて居場所の果たすべき機能の重要性を感じている。

今後の教室は学生の関わりを一步進める必要があるだろう。これまで教室に関わった学生の中にはその道の就職を果たした者もいて、それも成果であるが、学生が複数で関わるという特徴を活かして学生の教育との相乗性を高めること、例えば、子どもたちの日々の変化を学生各々が考えた指標で測定し一定の期間を経て評価し合うといった学習に繋げるような教育レベルの強化が新たな取り組みとして期待できるだろう。

※1 島村聡・金城隆一・鈴木友一郎・糸数温子「子どもの居場所等の意義と関係機関等との連携に関する研究」『地域研究第20号』155～165頁